

## シベリア抑留生活の裏も表も

島根県 福田 恭

(旧姓 高瀬)

はじめに

平成十八(二〇〇六)年を迎え、ふと、このままで良いのだろうか、何の記録も伝える言葉もなく消滅してしまうのではと考え、あの忌まわしい戦争、その後、多くの兵士がソ連の抑留で苛酷な労働を強制され、それに耐えかねて斃れ、かろうじて祖国の土を踏んだ抑留生活の裏も表もここに綴る。

せめて戦争を知らない人達に一人でも多く読んで頂けたらと思いつき当時を連想し書き綴りました。

### 第一章 中央アジア抑留編

ブラゴエ出発よりウズベク共和国に至る間

#### 一 輸送貨車の生活

昭和二十(一九四五)年十一月三日、シベリア

鉄道にて移動の指示がある。貨物列車に十五人ずつ分乗した。雪の広野を西へ西へと走る。

#### 二 車内の設備

設備は前後に二段ベッドがあり、中央に暖房用ストーブが一個ある。W・Cはなかった。二階部分四カ所に約三十センチ角の小窓あり、外部に鉄格子があり、内部に引き戸あり開閉できる。

#### 三 車中の生活

食事は一日三回、現地人が運んで来る。炊事用車両が連結されていた。三食ともパン、お茶のみ。下車は禁じられ、しかしながら生理現象の大・小の排泄は止める事ができない。小の方は引戸を開き放出する事が出来た。しかしながら大の方はその様な訳にはいかない。大の時に限り下車の許可が出る。でも遠方に行く事は逃亡の恐れあるためやむを得ず列車の下で一列に並び用を足すことが許された、これも少時間の停車を利用する。

急に広い海に出る、これは、バイカル湖であった。

湖畔を半日走り、途中より中国の西域を国境に併

行して南下、ウズベク共和国の首都タシケントを通過し労役地ベガワード收容所に到着する。実に二十日間の列車での生活であった。(昭和二十年十一月二十二日)

### 列車走行中の出来事

#### 一 思わぬ災難

途中列車の下で排泄中、ヤレヤレと思った瞬間、現地人が現れ、持ち物を手当たり次第かつぱらつて行った。アツという間の出来事、無抵抗、残念で涙が出た。

#### 二 虱に襲われる

約十五日過ぎたごろから痒くて眠れないというパニック状態になった。原因は虱の発生であった。昼夜もなく裸になり虱取りが始まった。肌着に成虫、幼虫、卵が整列し、取っても取っても次々と育ち、駆除の方法も無くお手上げとなる。

ふと、高熱に弱いと、それならば寒さにも弱いのではと考え、幸いマイナス二〇度から三〇度の極寒の地ゆえ一晩さらせばと案が出る。早速小窓

の鉄格子にくくり一夜さらしてみると完全に死滅し、思わず歓声が上がった。

#### 三 次の災難

虱駆除の順番が小生に来了。例の小窓に肌着はもちろん、下着も鉄格子に固く絶対に落ちないようにくくり一夜明けてみると陰も形もない。不思議に思った、残念ながら現地人にかっぱわれたと分かった。大切な大切な物をなくし泣いた。その後はこの駆除は中止する事になった。

#### 就労地ベガワード收容所に着く

#### 一 砂漠の荒野を行く

首都タシケントを離れ、西南アフガニスタン国境方面に枯れかかった雑草の荒野を列車は山もない人家も人影もない砂漠を走った。約三時間後駅舎のない野原に止まった。下車の指示が出る。警備兵の連行で約二時間歩いた。

#### 二 收容所に到着

周辺が鉄条網に囲まれ、監視塔のある收容所に到着した。

外見は土煉瓦の壁、屋根は草木で覆われ土が塗られた粗末な古い建物であった。同じような建物が二十棟はあった。

### 三 設備、宿舎について

一棟約五十人単位で入居。四人用二段ベッドが十二個から十三個ある。出入口は二カ所あり、道路は踏み固まってカチカチになっていた。以上我々の寝室兼休息室である。

### 四 便所は

ラーゲルの片隅に一カ所あり。長方形の穴が掘られ板が橋状に渡され併列で大・小使用する。(ソ連兵も同じ様に使用)

### 五 その他

ラーゲルの出入口付近に事務室、医務室等がある。炊事場、湯茶の補給所、洗面所、倉庫等の建物はラーゲルの中央部にあった。浴場の設備は無かった。

## ラーゲルの生活

### 一 宿舎内生活について

ラーゲルの収容人数は千人、各棟五十人の中隊として分けられ中隊長、補佐、通訳の割で編成され宿舎に入る。ベッドは昔の戦友が隣になる様に自分らで決めた。

寝具は各人に敷布団、毛布、枕が支給された。(元ドイツ兵の使用した物で洗濯済みであった。朝・夕の点呼はソ兵の立会いなし)

### 二 衛生面、身体検査、体力の格付け

二日後中隊別に広場に集まり軍医の身体検査が、軍医、看護兵の順で行われた(雨の日、寒い日は宿舎内)。全員。パンツまたはフンドシー一枚の裸になり順番に係官の前に立つ。体重、身長を計らず聴診器も当てることなく外見だけで一級、二級、三級の三つに分けられる。月一回行われる。

一級 外見中身ともに健康そうな人 約八十パーセント

二級 やせ気味で弱そうに見える人 約十五パーセント

### 一 セント

三級 軽い病気や欠陥がある人 約五パーセント

ト

### 三 作業の内容

一級及び二級は労働要員と定められる。これで労働体制は出来た。

二級の一部はコルホーズに行く事もある。

三級は炊事要員、倉庫番、清掃等軽作業。

### 四 第二ラゲルについて

作業現場近くに第二ラゲル約千人收容所があり、聞くとまだドイツ兵が残っていると、でも近々日本兵が来る予定だそうだ。

我々のラゲルを第一ラゲルと呼んでいた。

### 五 食事について

朝食パン二五〇グラム、砂糖朝昼用二〇グラム、昼食パン一〇〇グラム、夕食粥二〇〇グラム（米または麦のトロトロの粥の中に肉、魚、野菜が入っていた）。

### 六 食事の配給、配分について

当番制で炊事場にグループ別に取りに行く。当番が各人に分配する（朝夕）。昼食は朝食のパンと

同時に受け、作業場に持参する。

朝、湯茶は飯盒で人数に応じて配給あり。各人は湯茶を水筒に入れて作業場に持参する。水は制限が無く空腹を補うため飲む。

### 七 食事の配分について不満出る

食事の配分について、量的について自分より人のが多くまた大きく見えて人間の欲望の限界が不満が出る。協議の結果、何物もくじ引きで配分することとする。

### 強制労働について

#### 一 出発時の点呼

出発時の点呼は十列に並び警備兵が数え、途中でやり直しが毎日のようにあり、時間がかかった。作業場への往復は隊列を乱さないよう注意される。

#### 二 労働の体制

労働は三交代制及びノルマ制に。

労働時間は一日三交代制で組まれる。

午前九時より午後五時まで八時間

午後五時より午前一時まで八時間

午前一時より午前九時まで八時間

ノルマ制が決められる。

目標の仕事量が決められ、毎日やった仕事の量を調べパーセントで表す。

一〇〇パーセント達成が当然でノルマー一〇〇パーセント以上の部分に対して給料が割り増しされ、低い場合は減額される。抑留者の場合は一〇〇パーセント越えた分はソ連の通貨、ルーブルで支給され、低い場合は食事が減らされる。慣れない仕事のため常に食事が減らされた。

労働の内容と目的

### 一 作業場について

作業場は一面の起伏のある荒野で、遠くに山らしいものが霞んで見える。人家らしいものは無く枯れ草が少々ある。

砂漠の一面に運河を掘り水を通し、下流で落差を利用し発電所を建設し、将来は農地を造る目的のようである。

運河を掘るための作業場に各中隊が配置され、

毎日河の中心部の土を堤防部分に麻袋に入れ担ぎ運ぶ作業が約二年続いた。例のノルマ達成には程遠かった。

トラック、ベルトコンベア、シヨベルカーの機械類はなく、すべて人力であった。

### 二 当地の気候

冬は（十一月～二月）夜マイナス三度～マイナス八度ぐらい、日中は二度～五度ぐらいまで、春秋は二〇度～二五度ぐらい、夏は三〇度～三八度ぐらい。風は年中強かった。雨は非常に少なく雪は積もる事はなかった。

### 三 現地人の住居

乾燥地で風は強く蟄居生活であった。地上から見えない。

生きるためのアイデア

### 一 生きるためには

空腹と戦うためには蛙、蛇、とかげ、亀、バッタ、イナゴ、カマキリ、カタツムリ等食べられる物は手当たり次第食べる。料理方法は焼くか煮る。

## 二 現地人と物々交換

約六カ月過ぎたころより監視も緩む。ラーゲルと作業場の間、現地住民ウズベクの女、子供がパンを持って我々を待ち、監視の目を盗み物々交換するようになった。

我々の私物品（石鹸、タオル、ハンカチ、紙類、筆記具、衣類）すべてパンに替えた。替える物もなくなった。いよいよ最後だ、日本兵の必ず着用している禪があった。次々に禪がパンに化けた。即ち禪も食べた事になる。

## 三 死亡者が出る

この様な困窮が続いた。栄養失調、伝染病、風土病、怪我等で死亡者も次々と出る。私の入隊以来の戦友も腸チフスにかかり死亡した。何の手段もなく他界、死の直前に手を取り合って泣いた。

## 四 エピソード

交換した禪はウズベクの女性のおしゃれ（ネットカチーフ）に使用され、頭にかむり得意そうであった。

## 技術者の編成・第一回のダモイ

### 一 技術者の作業隊編成

一年半くらい過ぎたころ、土工作業の運河は八〇パーセントくらい出来た。次は発電用のタービンの設置のための作業隊が編成される。旋盤工、トラック運転手、大工、左官等の技術者及び経験者で編成約百人。

### 二 初めての帰国（ダモイ）

二十二年五月ごろ、帰国者三百人の発表がある。その日のうちに貨物列車でベガワードを離れる。主として三級、二級及びアクチーブが帰った。

### 三 アクチーブとは

入所半年後より思想教育が行われる。思想的に熱意のある若手の中より選り抜かれた教育をし、リモートコントロールされた人をアクチーブと呼ぶ。我々を監視する。各中隊に二、三人混入され同じように生活、作業もする。作業中及び平常の会話も出来なくなる。ソ連の誹謗、悪口を話せばその場で摘発連行される。

物々交換を再び始める。害虫に悩む

### 一 パンとの交換再開

技術作業隊に編入された人達が持ち帰ったニーム線、銅線、ジェラルミン、ステンレスの切れ端を材料としてユビワ、ネックレス、クサリ、スプーンを手造りで作製、再びウズベク人とのパンの交換が始まった。作業場より帰り余暇を利用して、これらの製作に熱中した。

### 二 蚤に悩まされる

入所後六カ月ごろより蚤の被害に悩まされる。作業から帰ると先ず毛布にもぐっている蚤退治が日課の一つとなる。取っても取っても減る事はなかった。これ以上は発生源を断つしかないと考え、結局ベッドの床下の土の中と分かった。その土は長い間に積もった土ぼこりで、全員でその土ぼこりを取り去り退治する事が出来た。

### 三 南京虫の被害

同じころ南京虫にも悩まされた。南京虫は就寝中に出てきて首筋等露出部分の血を吸う、痒くて

寝られない。朝これを退治する。明るくなると周囲の木材の割れ目や穴に入る。入れないよう防護策をとる。しかし次は天井に登り上からポトリポトリと落ちてくる。この対策は殺虫剤が無く出来なかった。

### 四 虱について

虱は一カ所に一回入浴の名目で蒸気滅菌があるので被害は少なかった。

### 二回目のダモイ、娯楽、入浴

#### 一 二回目のダモイ

昭和二十三年五月、二回目ダモイの発表がある。約三百人、前回と同様、数時間後出発する。ラールの人数も四百人に減少した。残された者としては望みも消え、今年も駄目だったかとガックリ。

#### 二 娯楽の時間が出来る

少人数となり警備も緩み、娯楽として歌、音楽の発表会が行われるようになった。ただし歌詞はボルガの舟歌等ロシア民謡に限られる。

### 三 初めての入浴

初めて本当の風呂に入れるという発表がある。

トラックに分乗、古い建物に到着する。入る前に衣類を一人分ずつ紐でくくり滅菌室に入れる。浴室に入るも浴槽がない、ボールに一杯の湯の配給で全身を洗い二十分後自分の衣類を受け取り完了する。初めての風呂も空振りだった。

### 三回目のダモイ及び車中の出来事

#### 一 三回目のダモイ

昭和二十三年十月末、帰国者の呼び出しがある。今回は自分の名前もあった。ただし技術者は残る事となる。

#### 二 列車中の出来事

途中全員集会中の出来事であった。第一ラゲル当時の千人の委員長でありアクチーブでもあったT氏が実行委員長としてアジの最中に、大衆の一人より発言、T氏の三年間の言動に対する批判が出た。次々と続出し、T氏の自己批判を求める。結局T氏は一瞬にして反動分子とされ、大衆の奉仕者となり掃除、雑役をする。(この世の厳しさを

痛感した)

#### 三 ナホトカ港に着く

三年前に通った荒野を東に向かつて走る。バイカル湖を経て待望のナホトカに到着した。十一月のナホトカ港は日本の輸送船の姿はなく淋しい凍った港であった。

突然一人のアクチーブの発言が聞こえた。「同志諸君、我々はソ同盟のお陰で今日がある。日本の吉田反動内閣は船をよこさない、同志諸君、今一度ソ同盟の恩にむくいるため来年三月まで作業を続けようではないか」とアジを飛ばした。これに対する発言は一言もなく再び新しい地に向って列車は走った。

以上で中央アジア抑留編を終る。

### 第二章 シベリア抑留編

#### 新天地に到着

#### 一 新しい作業地着

ナホトカより列車で数時間で新しい作業地に到着(約百人)。駅舎もない広場に下車、三百メートル

ルくらいの位置に日本兵の使用した古い建物が二棟あった。おのおの五十人入居、新しい収容所生活が始まった。(地名は記憶になく淋しい寒村であった)

## 二 生活、設備

生活様式はほぼ前と同様でシベリアは寒冷地のため暖房設備が必要、一日中焚火をし暖房する。服装は持ち物を全部着て防衛する。手袋などは毛布等の布きれで手製で作る。食事の量は以前と同じでも多少調理方法が違った部分もあった。炊事場、W・Cは別棟にあった。

## 三 作業について

夜中に急に起こされ集合する。持ち物はなし、防寒具はすべて着用する様指示があった。鉄道の沿線に連行され、その広場に木材(長さ二メートル)が線路に向けて積まれていた。各十人の班に分かれその位置に待機する。間もなく貨物列車が入る。有蓋車、無蓋車半々で二十連結。「これよりこの木材を各班で一車両に二時間以内で積み込み

を完了」する様指示が出た。初めての作業で隊長以下あぜんとする。重く、高い位置の貨物に積み込む作業は到底無理、いずれ怪我人が出ると考える。現地人らしい監督が現れ早くやるように大声でどなる。その後別の監督が作業の方法を指導説明する。有蓋車の場合二メートルの木材を中央入口より積み両側に天井まで積み込み、後、中央部分に積み込み引戸を閉めて完了。無蓋車の場合は両側に臨棒という長さ二・五メートルの棒をくずれないように固定して立て、先ず反対側に立て手前より平均的に積み込む。途中しつかりと鉄線で結び固定しながら二メートルまで積み上げる。終ったら両側に臨棒を立て鉄線で前後左右にくくり終了する。

作業の終了まで四時間かかる。直ぐ発車する。馴れたら三時間くらいで出来る。マイナス二〇度からマイナス三〇度の寒さでも作業中は汗が出る、寒さは感じなかった。発車後ホツとし、顔を見合わせ大笑い。髪の毛もひげも汗でぬれてそれが凍

って白髭のおじいさんになっていた。この作業が一日一回くらいあり約七カ月続いた。三月になってもダモイは無かった。

### 新しい作業地に移動

#### 一 新地について

六月のある日、自分達の小队（五十人）に移動の指示がある。私物を全部持って徒歩で原始林の奥地に約五時間かかって到着した。宿舎は掘った立て小屋で屋根は樹木の皮で覆われ細長く、両側に並んで就寝する。中央部分の敷力所に暖房用の焚火をするようになっていた。

#### 二 伐採作業について

作業は立木を伐採して冬季にトラックで前作業地の鉄道線路沿いに運ぶ原材料の準備であった。二人一組で鋸と斧を渡され、監視兵に連行され奥地に入り思い思いに立木を伐採し、二メートルに切りトラック用道路まで運ぶ。これが毎日の作業であった。この仕事が十月まで続く。

#### 三 最後のダモイ

昭和二十四年十月二十日ごろ、全員集合ダモイが伝えられた。

我々の乗る貨物列車が待っていた。ナホトカ港に着き、色々手続が完了、夢のダモイ船興安丸に乗船した。これで帰還が確定した。抱き合って泣いた。実に中国戦線六年を加え、十年ぶりの帰国であった。

### シベリア編

#### 一 営倉について

貨車に木材を積み込む作業について指定の時間が大幅に遅れた場合、ノルマ不足で小隊長が代表で食事抜きで営倉に一晩入れられた。営倉とは約五十センチ角の筒状で立ったまま体をくずす事も出来ない状態で暖房もない個室のことを言う。

#### 二 松の実を食事の補給に

伐採作業終了後、残った時間を利用して松の実（松かさ）を取る。二十メートルから三十メートルの大きな松に日本の松笠より二十センチ以上大きい実があるのを発見。高いので危険はあるが食

うため登る。

夜焚火で焼いて食べる。あやまって落下して怪我人が出るし死亡者も出たので禁止する。

### 三 白馬が走る

零下二〇度から三〇度の寒冷地のため何もかも凍結する。馬が汗をかく、これが凍って白馬となる、これが走る、エキゾチックな情景であった。

### 四 排便も凍る

話が下卑るが大の時、落下と同時に凍結し塔形となり、くみ取る事が出来ずハンマー等で粉碎して片付ける。

### あとがき

中央アジア、ウズベク地区三年間、シベリア地区一年間、計四年間の長い抑留生活の中で食べる楽しさ、話す楽しさ、眠る楽しさの三つの楽しみを奪われた。

努力とアイデアでこれを克服する事が出来るという体験を得た。

最後に、友は亡くなり病と闘い、最近は便りも

少なくなり寂しくなる。しかしこの体験を残すのに後がないと思ひ、老骨に鞭打ち、見たり聞いた感じた事をありのままに綴りました。

### 【執筆者の紹介】

生年月日 大正八（一九一九）年七月十六日

出生地 島根県出雲市下古志町

旧姓 高瀬 恭

現住所 島根県松江市浜乃木

学歴 島根県立（現在）出雲商業高等学校

校卒

軍歴 昭和十四年十二月 広島歩兵第十一

連隊へ入隊

昭和十五年四月 藤第二三三連隊に編入（湖北省漢口）

昭和二十年八月 満州国新京（長春）

にて停戦 ソ連軍により武装解除

昭和二十年十月 ソ領ブラゴエシチ

エンスクに入国（四年間の抑留生活）

職  
歴

昭和二十四年十月 ナホトカ港より  
舞鶴港に無事復員す

商業高校卒業後、京都市の織維会社  
に勤務、後、広島に入営

昭和二十五年から十二年間松江市白

潟本町 今村商事に勤務

昭和三十七年より 福田商事株式会  
社設立、社長として現在に至る

(島根県 坂本 昇一)

シベリア抑留体験記

島根県 塚 田 信 雄

一 はじめに

旧ソ連の独裁者スターリンは米英と密謀し、その結果、不可侵条約を締結し中立の立場であるのにも関わらず一方的に破棄し、我に倍する大軍を侵攻させた。それは敗戦間近の我が国の情勢を予測し、自国の利権を得るのを目的とした参戦に外ならない。その証拠は、関東軍を初め備蓄したありとあらゆる物資を略奪したことだ。さらに軍将兵約六十万の大軍を戦後において、国際法を無視し我々を騙し続け、集団拉致した。そのうえ飢餓と強制労働が原因で約六万人死没させる。この国家的犯罪は、いかにエリツイン大統領が国会で謝罪しても言葉だけで全く誠意がない。私は四力年抑留され運よく帰国し今日があるが、二十〜三十